氏　　名	梶原（かじわら）　はづき
学 位 の 種 類	博士（社会学）
報 告 番 号	甲第４７８号
学位授与年月日	２０１８年3月３１日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	人と動物の関係性の社会学―東日本大震災における飼い主とコンパニオンアニマル
審 査 委 員	（主査）木下　康仁（立教大学大学院社会学研究科教授） 野呂　芳明（立教大学大学院社会学研究科教授） 岩間　暁子（立教大学大学院社会学研究科教授） 奥村　隆（関西学院大学社会学部教授） 安藤　孝敏（横浜国立大学大学院環境情報研究院教授）

Ⅰ．論文の要旨

（１）論文の構成

本論文は以下の 7 章で構成されている。第一章「人と動物の関係性の社会学」で本論文の目的と理論的枠組みを提示、第二章「先行研究の中での本論文の位置」でアメリカ社会学会において人と動物の関係性に関する研究（Human-Animal Studies、以下適時 HAS）がサブフィールドとして領域形成してきた過程、災害と動物に関する研究、そして、理論的、方法論的枠組みである批判的実在論を論じ、本研究の位置づけを行っている。第三章「研究の方法」ではインタビュー、参与観察、フィールドワークなど質的研究法を中心とし補足的にアンケート調査を実施したとする説明がなされ、第四章「津波災害をコンパニオンアニマルと共に生き抜く」で津波被災したコンパニオンアニマルの飼い主の経験とそこに現れた関係性を論じ、続く第五章「原発事故の災禍をコンパニオンアニマルと惑う」では原発事故を経験している飼い主の経験とそこでの関係性を考察し、第六章「災害という日常が壊れた場所で立ち上がる関係性」で津波災害と原子力災害という異なる被災経験が飼い主とコンパニオンアニマルの関係性をどのように特徴づけるのかを比較的に考察し、最後の第七章「結論」で終わっている。

（２）論文の内容要旨

本研究は人と動物との関係に関する研究であり、人との関係がもっとも緊密なコンパニオンアニマルを例に、東日本大震災において津波を被災した飼い主たちと原発事故を被災した飼い主たちが直面した経験を詳細なフィールド調査から再構成し、非日常時に立ち現れる飼い主とペットの関係の特性を明らかにしている。この点で災害研究であるが、同時に、非日常時に焦点化することで日常の中に埋め込まれている飼い主とペットの関係、そして、その一般的受け止め方を批判的に考察し、日本社会における人とペットとの関係性がペットの生命の価値の矮小化と崇高化という矛盾を内在化していることを論じたものである。

1990 年代以降、欧米では人と動物の関係性を研究する Human-Animal Studies（HAS）という学際的な領域が発展し、社会学のサブフィールドとして確立されつつある。一方日本では、人と動物の関係性を社会学的に考察する研究は非常に少ない。本論文は「現代日本社会における人と動物の関係性の特性は何か、そしてそれは社会にどのように影響しているか」という問いを設定し、東日本大震災で被災した飼い主、動物ボランティアなど関係者計 65 名へのインタビュー、補足的な 74 名への対面アンケート調査、仮設住宅などにおける参与観察から、津波災害と原子力災害で避難した飼い主が、コンパニオンアニマルとの関係性をどのように語っているか、そしてその関係性の表出として災害時にどのように行動したのかを記述し分析している。災害時だからこそ見えてくる飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を、津波被災地域と原発事故被災地域の差異と、飼い主の経験における共通性、そしてそれを生み出す構造の観点から考察した。

現代社会の中で人と人以外の動物は複雑に関係しあいながら共存しているが、家庭の中で家族として暮らすコンパニオンアニマルは、飼い主と個別の関係を築くという点で人と動物の関係性を探求する端緒として最も重要である。しかし、日本の社会学の中では、人とコンパニオンアニマルの関係性は本格的に研究されてこなかったが、本論文は、現代日本社会における人と動物の関係性の特性を探求することにより、「人と動物の関係性の社会学」の確立に寄与することを目指したものである。

先行研究の検討として、2002 年にアメリカ社会学会の中に、Animals and Society セクションが正式に認められるまでの議論の流れをまとめている。現在の HAS の主な研究を示し、権威ある社会学者からの、動物の権利などは「小さな問題だ」という批判に対して、HAS 領域の確立に力を注ぐ社会学者たちは反論、反証しながらセクションの申請をし続けた。

また、本論文は災害社会学の一部でもあるので、災害社会学の中で災害と動物の先行研究を概観している。本論文がメタ理論として基礎付ける批判的実在論については、科学哲学論争を踏まえ登場した成立の経緯を、Bhaskar の基本文献に沿って述べている。以上の研究レビューによって、本論文の社会学研究としての位置を明確にした。本論文は Human-Animal Studies（HAS）の一部であると同時に災害社会学の側面も持ち、批判的実在論をメタ理論として導入している。

第 3 章では研究の方法について具体的な調査地、調査期間、調査対象者等の詳細を示し、最後に研究方法の妥当性と本研究で行った倫理的配慮について述べている。

本論文の中心となる第 4 章から第 6 章までは、災害時だからこそ見えてくる飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を、インタビュー、フィールドワークから得たデータから分析したが、その際に、本論文の理論的アプローチである批判的実在論を研究実践に応用している。経験的ドメイン（empirical domain：人々が経験する世界）からアクチュアルドメイン（actual domain：現実的事物または出来事の領域）、実在的ドメイン（real domain：出来事を生み出す構造とメカニズム）へと遡り、実際に目に見える出来事からその出来事を生起させている構造とメカニズムまでを、アブダクション（理論的再記述）とリトロダクション（溯源的推論）の推論方法を使って説明することを試みている。

本論文では、災害の個人レベルの経験を重視し、まず津波の被災飼い主と原発事故の被災飼い主についてライフストーリー法を用いてその経験を記述し、同時に参与観察その他のフィールドワークで得たデータや、報道資料などを併用して全体像を俯瞰する作業を行っている。

津波災害で避難した宮城県と岩手県の飼い主たちを取り上げる第四章では、飼い主たちがコンパニオンアニマルとの関係性をどのように語っているか、そしてその関係性の表出として災害時にどのように行動したのかを記述し分析している。飼い主と関係者 28 名へのインタビューから、津波災害を生き抜いた飼い主たちとコンパニオンアニマルの関係性の特性は、「飼い主が生を紡ぐためにコンパニオンアニマルが生きる目的になり、全ての選択の中心になっている」という意味の「生を紡ぐコンパニオン」として独自に概念化されて

いる。

第 5 章では、原子力災害で避難した福島県の飼い主たちがコンパニオンアニマルとの関係性をどのように語るのか、そしてその関係性の表出として災害時にどのように行動したのかを、津波災害と比較しながら記述、分析している。飼い主と関係者 37 人のインタビューに加え、74 名のアンケートのデータも記述統計的に使用しながら、原発事故地域の飼い主たちの語りと行動に表れている関係性の特性を表す、「大地と繋ぐコンパニオン」という概念を提示する。この概念は「飼い主がコンパニオンアニマルの中にある野生性と自然の中にいるという環境を尊重することにより、動物が飼い主と家族、土地、環境を繋ぐ存在となっている」と定義されている。

続いて第六章で、本論文の問い、「現代日本社会における人と動物の関係性の特性は何か、そしてそれは社会にどのように影響しているか」に立ちもどって、災害時に現れた飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を考察する。津波災害地域と原子力災害地域の飼い主の語られた関係性と、その関係性の表出である飼い主の行動から前者を「生を紡ぐコンパニオン」、後者を「大地と繋ぐコンパニオン」として概念化し、さらに両者の関係性の差異は何によって生起するのかを考察し、人間中心主義、政策と現場のギャップ、原発産業優先のパラダイムが、災害時にさらに強く結びつく飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を無視し、支援から飼い主と動物を排除し抑圧する構造になっていたことを述べる。

さらに何が人と動物の関係性を無視させるのか、その根底にはどんな構造があるのかという問いに対して、災害のほとんどの場面でコンパニオンアニマルの生命の価値の矮小化が無意識に行われ、また一方では動物救助に集中する活動家による動物の命の崇高化が行われ、結果として飼い主との関係性は重視されなかった点を強調する。日本社会における人と動物の関係性の支配的な捉え方である、経済優先の論理の範囲内にある動物愛護論では、災害時の人と動物の関係性は的確に捉えることができず、その齟齬が飼い主とコンパニオンアニマルの関係性が無視される背景にあるという本論文で得た新たな知見を示した。そして、これまでの考察を通じてたどり着いた問い、「なぜ人間は別の種と結びつき共に暮らすのか」を示し、若干の考察を付している。最後に、本論文の限界と今後の展望を述べている。

Ⅱ．論文審査結果の概要

（１）論文の特徴

本論文は、第一に、人と動物の関係に関する日本の社会学における先駆的な研究である。そのため本論文はアメリカ社会学会においてHuman -Animal Studiesが独立したセクションとして設立する過程を詳細にたどることで、HAS がなぜ社会学の研究領域であるべきかをめぐる主要な論点を提示し、日本における今後のこの領域の研究に基礎を提供している。コンパニオンアニマルは家庭の中で家族のような存在として飼い主との関係にあるから、人と動物の関係を社会学的に研究する際にコンパニオンアニマルを取り上げるのは有効なテーマ設定といえる。

第二に、本論文は人と動物の関係に関する研究と災害研究との統合を意図している。非日常時において立ち現れる飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を理解することで、日常において愛玩対象として漠然と受け止められている飼い主との関係、その背後にある破棄処分を含んだ商品化された世界、その結果としてのコンパニオンアニマルの命の不可視化などの知見を導いている。これは、東日本大震災における津波被害を受けた飼い主とコンパニオンアニマルの関係について、また、現在も継続している原発事故の被災飼い主とコンパニオンアニマルなどの動物との関係について、それぞれ被災前の日常、被災直後、そして、仮設住宅などで一定の落ち着きを得るまでのプロセスを明らかにすることによって達成されている。

第三として、被災飼い主とコンパニオンアニマルとの関係性を特徴づけ、それがどのようなメカニズムによって生成されているかを重層的に理解するため批判的実在論の援用を試みている。被災飼い主たちの経験だけでなく、そのときに被災地域で起きていた状況、さらに、なぜ飼い主とコンパニオンアニマルが避難所などにおいて排除されたのかについて考察を試みている。

第四に、本研究は梶原氏の長期間におよぶ詳細なフィールド調査に基づいている。調査は学内外５件の研究助成を受けながら、2012 年 7 月から 2016 年 10 月までに岩手県、宮城県、福島県で被災飼い主 53 名（それぞれ 5 名、14 名、34 名）とその他、救助ボランティア、獣医師、自治体職員等 12 名の計 65 名に詳細な半構造化インタビューを行い、福島県では補足的に 74 名への訪問アンケート調査を実施した。フィールド調査は岩手県 2 回、宮城県 10 回、福島県 13 回、関東 8 回、関西 1 回におよび、訪問した仮設住宅は岩手県 2 ヶ所、宮城県 2 ヶ所、福島県 16 ヶ所である。

（２）論文の評価

本論文は 2017 年 1 月 11 日の社会学研究科委員会において予備審査会の開催が承認され、3 月 7 日の研究科委員会において予備審査委員会が指示した課題に対応することを条件に本提出が認められ、4 月 27 日に本提出された。審査委員会は第一回審査会を 2017 年 6 月 16

日に開催して申請者に面接を行い、社会学における人と動物の関係(Human-Animal Studies)領域の形成について十分なレビューが行われていること、津波と原発事故の飼い主被災者へのフィールド調査が適切かつ詳細に実施できていることなど本論文がすでに高い成果を上げているとの評価では一致したものの、①理論枠組みの批判的実在論が先行研究やフィールド調査の結果と十分統合されていないこと、②津波被災地域と原発事故被災地域とで飼い主とペットとの関係性の比較が十分明らかになっていないこと等を、修正要求として申請者に指示した。これを受けて修正論文が 9 月 29 日に提出され、第二回審査会を 11 月 10 日に開催した。この段階で指示に応じた修正がほぼ適切になされていることを確認し、中心概念の命名や批判的実在論に基づく考察（第六章）についての完成度への期待を伝え、それを受けて 11 月 24 日に字句修正を含む修正論文を委員全員で確認し、12 月 18 日に公聴会を開催することを承認した。

本論文は、以下の点で高い評価が与えられた。

第一に、本論文は日本の社会学における人と動物の関係性に関する嚆矢となる研究である。文献レビューは適切になされており、この領域におけるアメリカの学際的な研究状況を踏まえたうえで、HAS がアメリカ社会学会において独立したセクションとして樹立される過程を主要な議論をたどりながら説得的に論じている。

第二に、簡単には語りがたい困難な被災経験をした飼い主に対して時間をかけてラポール形成をていねいに進め信頼関係を築いており、それにより当事者の経験を聞き取ることに成功している。この背景には梶原氏自身がペットロスに関する NPO 法人としての活動を長年にわたり実施しており、飼い主との共感的な素地があった。インタビューに加え、参与観察とフィールドワークも適切に実施されており、被災地３県の仮設住宅での参与観察、福島県では避難指示区域である飯館村と葛尾村で残されたペットへの給餌活動ボランティアや猫の捕獲と避妊去勢手術のクリニックボランティアに計４回同行している。その結果、本論文は東日本大震災における飼い主とコンパニオンアニマルの被災経験を非常に詳細に記録したものとなっており、今後の研究資料としての価値を有する。

第三として、こうしたフィールド調査の結果は、津波被災と原発事故被災それぞれについてライフストーリーとエスノグラフィーの組み合わせで記述され、その構成関係と記述の筆力は優れておりリアリティを伝えることに成功している。ライフストーリーでは、津波被災ではコンパニオンアニマルを失った飼い主と、妻を亡くし娘とコンパニオンアニマルと共に生き残った飼い主にとって動物との関係性の意味付けが生活再建の軸となっていくプロセスが記述され、一方、原発事故被災では犬、猫、牛を飼っていた農家の飼い主が動物を置き去りにし、避難先から給餌に通う中で多くの死骸を目にし野生化する動物に接し、人間より一段下に見ていた動物の命に対して考えが変わっていくプロセスを伝えている。また、フィールドとしての仮設住宅や動物だけが取り残された原発事故被災地域は、飼い主の視点から生き生きと記述され優れたエスノグラフィーとなっている。

第四に、被災飼い主とコンパニオンアニマルとの関係性を津波と原発事故それぞれにつ

いて明らかにするために、震災以前のコンパニオンアニマルとの日常化された関係性を再構成し、それが被災直後とその後の避難生活のプロセスにおいてどのように変化していったかを明らかにすることに成功している。すなわち、津波被災の飼い主とコンパニオンアニマルは個別密着型で都市的な緊密な関係性を特徴とし、一体性の強いなかで被災し、また、津波という短期間の衝撃的な災害が組み合わされ、その後の関係性は「飼い主が生を紡ぐためにコンパニオンアニマルが生きる目的になり全ての選択の中心になっている」という意味の「生を紡ぐコンパニオン」と独自に概念化された。一方、的確な情報提供がなく避難自体の理解や期間がわからないまま避難し、その後現在に至るも収束を見ない原発事故地域の飼い主たちの動物との関係性は環境一体型であり「大地と繋ぐコンパニオン」として概念化された。「飼い主がコンパニオンアニマルの中にある野生性と自然の中にいるという環境を尊重することにより、動物が飼い主と家族、土地、環境を繋ぐ存在となっている」という意味の概念であり、もともと土着性の強固な地域における動物との関係性は、飼い主と動物だけの関係ではなく土地と環境を土台にして成立していた中での被災となったことを明らかにした。帰還可能性の情報に翻弄される中で置き去りにされ餓死したり野生化する動物、給餌に長距離を通う飼い主など、津波によるコンパニオンアニマルの喪失や一体での避難行動を特徴とする津波被災飼い主とは異なる関係性があることを提示し、飼い主の被災経験の複雑性を明らかにしている。

最後に、本論文は非常時にはコンパニオンアニマルであれ動物の命は犠牲にされてもやむを得ないとする命の矮小化と、救護ボランティアに代表される動物の命を守らなくてはならないとする命の崇高化が、結果として飼い主にとってのコンパニオンアニマルとの関係性の理解をむずかしくしていることを説得的に論じている。そして、その背景に平時における日本のあいまいな動物愛護論があるとする独自の解釈を提示できている。

こうした評価点を確認したうえで、以下の課題点も指摘された。経験的調査の結果とメタ理論として用いた批判的実在論の展開は、なぜ避難時に飼い主が排除されたのかの解釈をめぐってさらに深められる余地を残している。批判的実在論は解釈の可謬性を前提に推論を進める方法論であるが、本論文は最後で「なぜ人間は別の種と結びつき共に暮らすのか」という根源的問いに行きついたが、その探求は今後の課題として残された。関連して、論文の問いの構成をさらに明確化すれば調査結果の内容との対応関係がはっきりし本論文の完成度はさらに高められたのではないかとの意見もあった。ただ、こうした点は梶原氏の今後の研究者としての可能性への期待であり、本論文の博士論文としての評価を損なうものではない。

公聴会は 2017 年 12 月 18 日に本学で開催され、梶原氏から本論文についての紹介と説明があり、それを受ける形で審査員、並びに公聴会に出席した社会学研究科所属の教員と在学者からの質疑を受ける形で行われた。同氏の応答は、的確かつ明瞭であり、審査委員会は公聴会終了後の審査委員会において全会一致で同氏に対して合格の判定を行った。